紫珠

9

1970

昭和三十七年 五月二十八日 第三種郵便物認可
昭和四十五年 九月一日印刷 九月五日 発行
第十巻 第九号 毎月一回 五日発行

紫珠発行所

紫珠
昭和三十七年 五月二十八日 第三種郵便物認可
昭和四十五年 九月一日印刷 九月五日 発行
第十巻 第九号 毎月一回 五日発行

静けさに心を浸らせたいとき
〝もだんべぇーる〟を着る
華やかな集いの輪のなかで
〝もだんべぇーる〟が浮きあがる
青や赤や紫の花びらや
うろこ模様を染めあげた
〝もだんべぇーる〟
シルックの若い人のきもの

ドレスと呼びたいきもの
もだんべぇーる

SEIBU西武

（東宝）中山麻里

紫珠　第十巻　第九号

九月号　目次

涼　　気(短歌)	前川佐美雄	(3)
山　　雨	大伴　道子	(4)
蝶　形　花	木村賢一郎	(5)
遠　　雷	宮師　双美	(6)
野　の　果	中川タマキ	(7)
鷺草の花	山　年子	(8)
青　い　花(詩)	泉　朝子	(9)
ゆきひらの粥	三浦　信夫	(10)
想　い　出	園田　章子	(11)
野葡萄の紅をよみて	田中　克己	(12)
野葡萄の紅に	打木　村治	(15)
「野葡萄の紅」読後感	斎藤　正二	(16)
白樺赤松林居の歌	坂口謹一郎	(22)
詠　　草	荘・川村・古谷・三野・尾崎・園田・佐藤・菊地・桑原・横山・多田・古賀	(32)
断　　絶(詩)	多田　久雄	(35)
負　債　者	宮師　双美	(36)
詠　　草	武田・水野・唐沢・中山・平野・栗原・清水・田中・松田・山口・斎藤・室岡・服部・吉田	(37)
おしらせ		(50)
後　　記	大　伴	(51)

表紙…リンドバーク・カット…大伴道子・山本八千代

前川佐美雄

涼　気

梅雨(つゆ)ながく遅かりし蟬が京の祇園祭りとなりて急(にはか)にやかまし

高原の秋が恋ほしもうら庭のから松と白樺に朝の風あれば

豚尾草などと嫌はるる異国種の秋のきりん草も一枝(いつしふぜ)風情ある

「野葡萄の紅」を読む

田中克己

東京へ帰って来たのが昭和三十二年だが、わたしは十年間はなれていたこの大都会になかなか馴染めなかった。関西にいた方がよかったのではないかとさえも思った、詩人たちは方々で会をして歌っている様子だったが、浅野晃さんなど少数の人を除いては、帰って来たかともいってくれなかった。わたしは土曜日、奈良女子大へ中国文学を教えに行って、帰りには必ずといってよいほど寄せてもらっていた前川邸をとりわけなつかしく思った。

その前川佐美雄先生の弟子たちが会をするといって、呼んでいただいたのは上京後そうたっていない時だった。わたしはその会で前川先生のうわさをし、歌の批評をといわれると、わたしには歌はわからないといって拒んだ、会費をとってもらえないというので、その会にも出にくくなった。わたしは年とったので、こんなつまらないことだけしかおぼえてないが、この会の中心だったのが大伴さんでお顔もものごしも十年以上たった今、少しも変っておいでないと思う。

紫珠を毎月送ってもらって、仕方なくあけている中に「泉朝子」という人の詩がのっているのに気がついた。わたしは叮嚀に読んで「なんて幼い人だろう、多分、非常に若い人で、心臓の痛みもはっきり感じないが、書けずにはおれないで書いていらっしゃるのだろう」位の感じで読みながしていた。わたしは詩では点がきつく、もらった詩集でも同年輩のものでないと同感しないのである（最近亡くなられた阪本越郎氏の遺稿詩集「未来の海へ」にはその理由で非常に感動した。阪本氏の急逝をかなしむ気持もそれを助長したのだが、感動の真の理由は作者の生死の点ではない。阪本さんとは「四季」の同人同士であったが、会うことは少く、ドイツの詩が好きという点で先づ安心して近づき、穏やかな、そのくせ上流階級の坊ちゃんとしての上品さに打たれ、作品もその通りだと思ったのである。しかしこの才能、この「人」が死をたびたび予告して歌っておいでなのには、悲しい気持がした。はたして予告なく一日で急逝されたのである）

話が横にそれたが泉朝子さんは、「信不在」「孤独」などさびしい詩をお書きである。こんな題だけで予測されるさびしい詩以外でも、「心の中で」は、

愛されてゐる時でも
あなたは　ひとりぼっちだった

ではじまっている。この「あなた」は泉さん自身ではないだろうか。人間全体を指してゐるのだろうか。二人称か三人称かそれとも一人称か、わたしは考えあぐねて、泉さんを「ひとりぼっち」と決定した。そのあとわたしはわたし自身をふりかえる。わたしの友はみなわたしを見棄てた。わたしの四人の子の中、一番ひいきの長女は二人めの孫を生んだあと日立ちが悪く、昨日は電話口で「こわい」と泣き叫ぶので、家内は新幹線でとんで行った。わたしはいま末っ子の出社のあと、ただひとり朝の涼しい間にとこの文章を書いてゐる、ここはわたしのつ

いのすみかで、わたしはここで果てる予定である――神様がおゆるし下されば――。到頭出てしまったが、わたしは孤独ではない。いつもよこに主がいらっしゃるのだ。わたしをそそのかして悪を働かし、贖罪の詩を書かす「魔女」もわたしには近よって来ない――恩師佐藤春夫先生にはたびたびそれがやって来て、先生は良い詩を作られたが――不肖の弟子は恋いたてまつる主のみそばにいることを無上の幸せと思う。孤独はない。ひとりぼっちはない。あるとしたら時々―そのあとでは罪と感じ贖罪の祈りをするが―　わたしにあらわれる狂気の瞬間だけである。この短い時間にはわたしはファースト博士よりも高慢となり、メフイストのよき餌食となるのだ。

わたしはむかし方々の国、とりわけ西方の国々をあこがれた。証拠にベデッカーの旅行案内はみなそろえてある。ベネチア Venezia のカナール、プラツイア・サンマルコ――泉さんは「いつの日また渡る／カナールの橋／きみと／ともに」とこの市をおうたいである。わたしはいつか天に招かれて主とともにベネチアもボローニアもナポリも、いや地球上のあらゆる箇所を見るだろう。そしてそこの悲しみを慰め、哭く人とはともに哭き、それによって悲しみをやわらげるだろう。いまわたしは地上で「生きて(もしくは死んで)」いるのでその力はない。わたしは嘆息してこの美しい、さびしい、かなしい詩歌集を閉じた。

わが愛はみまかりしとふ歌よみてかはらぬ愛をわれは思ひぬ
アラスカを指して翔けゆく機のなかにさびしき人の乗りたまひしか

大伴道子様

一九七〇年七月一日

打木村治

このたびは大伴道子詩歌集をお恵送下されたいへん有難く存じました。

ちょっと忙しい仕事の最中でしたが扉をたたくような気持で、そっと膝の上で開けましたら読み付いてしまいとうとう読んでしまいました「野葡萄の紅」こんな素朴な題名の中から、若々しい、愛と美の執念みたいなものが、たたみかけて来て日本の魂に新鮮なエキゾチズムがとけこんでいるのに驚きました。――これから何度も拝読します。

海鳴り、を拝読中、ふとモウパッサンの水の上という小説を思い出したのがふしぎです。清烈な詩歌の弾奏と地中海の空にかかる青白いオールドミスに似た昼月（と、こうモウパッサンの先生はおっしゃるのですが）の強い対照を感じたからでしょうか。

詩歌同舟のこころみを讃嘆し、それによる訴えの深さを教えられ、それもお礼申上げたいと思います。また歌の活字の組み方を詩風を通して拝読しますと、ユニークな新らしさに目を引かれ、おどろきでした。

山本先生の絵に、いちいち長いこと目をとめて、詩歌の感動と絵の感動のバランスに何とも平安な歓びが托せました。

みごとな美しい心を造形された御本をいただきましたこと、お礼の言葉もありません。

それから、あとがきが人をうちます。こんどはやさしい色彩に盛られたこの人の随筆集を読みたいなあと私は思うのですが、ほかにも同じことを考える人も多かろうと私はひとりで微笑してしまいました。

心から御自愛を祈りましてお礼申し上げます。

編集後記

一週間ばかり　合同歌集の校正刷を抱えて軽井沢の山荘に行って居りました。宮師・中川・山の編集委員も逐次訪づれて、涼しい山荘でゆっくり校正を了えて帰りました。九月号編集の為に帰宅した東京の家の庭に、この八月のやがて立秋という時に、藤がいっぱい花を咲かせていたのに愕きました。何か季節が狂ったようです。東京を出た時は、七月の末にポプラが散っておどろいたのですが、藤の花は春の花よりも赤みをおびて房丈もやや短く何となくいたいたいたしいものが感じられました。こんな季節にも、皆様お変りもなく作品をよせられ心づよく感じました。

この号は又〝野葡萄の紅〟のために頂いた先生方の文章を載せることが出来ました。又宮師双美さんの、短歌研究八月号掲載歌三十首を、皆様にご覧頂き度く転載いたしました。

「紫　珠」

一、紫珠は紫珠同人会の発行する月刊誌です
一、歌会は毎月第三日曜日午後一時から四時迄赤坂プリンスホテルにて開きます。
一、歌会出席の方は雑誌詠草と一緒に歌会用一首をお送り下さい。
一、会員は月一回詠草五首から十首迄を締切日必着お送り下さい。
一、締切日は毎月月末です。
一、会員は誌代三ヵ月分前納のこと。

其他事務的な事については発行所の係までお問合せ下さい。
電話は（473）局　一八五〇

紫珠　9月号 第10巻 第9号

昭和45年 9月 1日 印刷
昭和45年 9月 5日 発行

編集兼発行人　大伴道子

印刷所　共同印刷株式会社
文京区小石川4—14—12

発行所106港区南麻布5-2-5
大伴道子方　紫珠発行所
頒価 200円　〒6円
振替東京　100483